

[特 集]

卒業生 — こころざし それぞれの志を胸に —

開学以来、幾多の卒業生を世に送り出してきた東京大学。
その活躍分野は実に多岐にわたっています。
今号は特集テーマを「卒業生」とし、それぞれの現在をご紹介します。



野口聡一氏 東大帰還挨拶

皆さん、こんにちは！ 宇宙飛行士の野口聡一です。今日は久しぶりにキャンパスに帰って来られてうれしいです。久しぶりにこのキャンパスを歩いて「とても美しい大学だな」とあらためて思いました。毎日、キャンパスを見ている人たちはそう思わないだろうけれど、皆さんは良い環境で学生生活を送れて、とても恵まれていると思います。おかげさまで、15日間の宇宙の旅を終えて、ここに帰ってくることができ、うれしく思っています。先ほど、私と一緒に地球の周りを回っていた大学応援旗を総長に無事、お返ししました。この旗をいろいろなイベントに生かしていただいて、ぜひ、東大の名が、世界だけではなくて宇宙に届くように、皆さんも頑張ってください。今日は本当にどうもありがとう！

—本学工学部広場にて

限りなき 天空への想い

野口聡一さん

2005年10月26日、野口聡一宇宙飛行士は母校、東京大学を訪問した。宇宙への旅に携えていった東大応援旗と航空宇宙工学専攻ロゴを返還し、多くの学生達に迎えられてのバレード。工学部広場に響き渡った野口氏の挨拶は、集まった人々に大いなる感動を与え、イベントは最高

潮に達したのだった。

野口聡一氏は1965年、神奈川県横浜市生まれ。高校1年生の時、TVでスペースシャトル初飛行を見て宇宙飛行への興味が芽生え、後に立花隆氏の著書『宇宙からの帰還』との出会いにより、「将来は宇宙飛行士に」と決意。以後、宇宙への思いを内に秘めつつ人生を歩んでいくこととなる。本学大学院工学系研究科修士課程では航空宇宙工学専攻へ。卒業後はIHI（石川島播磨重工業）でファンエンジン開発に従事。95年に宇宙開発事業団（現・宇宙航空研究開発機構：JAXA）の宇宙飛行

士公募に合格した。98年にはガガーリン宇宙飛行士訓練センターで訓練に参加し、その後もNASAで訓練を続行。

2005年7月26日、スペースシャトルSTS-114ミッションのもと、野口聡一氏は宇宙へと旅立った。20年以上も秘め続けてきた夢をついに実現したのである。宇宙を飛び続けた15日間に野口宇宙飛行士は3回の船外活動に従事した。そして、無事、地球へ帰還。

母校訪問を終えた野口聡一氏はNASAへと戻り、現在も訓練を続けている。再び宇宙へ旅立つ日のために。



一部写真提供：NASA

大学院時代の恩師が語る 「素顔の野口聡一」

大学院工学系研究科航空宇宙工学専攻
長島利夫教授



野口君は私が研究室を立ち上げた最初の頃の学生で仲間をまとめる中心的存在でした。あの頃の研究室の面々は皆、彼の素晴らしい性格やほとぼるような情熱を感じていたと思います。私がやり始めた研究の実験装置は駒場にあつて、彼は毎日、通って研究してい

ました。実験の手順もテキパキと考えてくれて卒論の学生の面倒見も良かったですよ。

当時、彼が宇宙飛行士を志望していることは知りませんでしたが、公募に合格した時に報告に来てくれて。卒業生はあまり研究室に来ないんですが、彼の場合はIHI時代にもよく顔を出していました。彼は「仲間」を大切にする人なんです。

土井さん、野口君、山崎さん……航空宇宙工学専攻から3人も宇宙飛行士が生まれるなんて予想していませんでした。今後もぜひ出てほしいと思いますよ。

宇宙の研究は複数の分野を統合していくもので、いわば日本の科学の「底力」を表す学問。技術立国の

証しです。本学航空宇宙工学専攻はその証しを世界に示していかなければならない。中国が有人飛行を成功させましたね。あれ以後、中国の技術力に対するイメージが一変しました。宇宙工学は世界にインパクトを与えるファクターを持っているんです。

人生においては「過去を振り返り、未来に創造的に生かすこと」が大切だと思います。野口君は子供の頃からの夢を思い出しながら努力を続けて公募にトライし、未来に向けて育とうとしてきた。今でも「火星まで行きたい」と言っている。そんな人間を世にたくさん送り出すことが日本を元気にする原動力になるし、世界への貢献につながると思います。（談）

無限なる自分への道程

藤田一照さん

藤田一照氏は禅僧の道へと進んだ人物。

飄々と語る藤田氏の言葉は「大学で学んだ教養を生かすことの大切さ」を
そして、「既存の枠組みにとらわれない志を持つことの大切さ」を鮮やかに浮かび上がらせます。

10歳の体験から 「禅の世界」へ

10歳の時、一瞬にして世の中の景色が変わってしまう経験をしました。夜、自転車に乗っていて、何気なく空を見上げた瞬間にこう、感じたんです。

「無限に広がった真っ暗な宇宙の中に、ぼつんと生まれた小さな砂粒のような俺がいて、ここで空を見上げている……俺はたったひとりなんだ。この無限の宇宙の中で、いつか、消えてなくなる」。

その瞬間、今まで当たり前生きてきた「自分が存在する世界」が「ミステリー」

になりました。宇宙というわけの解らないところに、わけの解らないまま自分が存在している。このショックはずいぶん大きかった。心拍数が上がって自転車がころびそうになったくらいですから。思えば、僕の今までの人生はあの日の経験がずっと影響してきています。10歳のあの日から20代にかけて「何が問題なのかも解らない宿題を課された」という気分がずっと続いていて「とにかく宿題を解決しなければ」と思っていました。

大学院博士課程の頃に鎌倉円覚寺の「学生接心」に参加しました。接心というのは腹いっぱい坐禅する合宿修行です。

最初は脚が痛くてまともに坐禅が組みませんでした。でも暗い中で「痛い痛い」と坐っている時の気分が10歳の時のあの瞬間に似ていたんです。「禅ならあの時に感じた問題に答えてくれるかも知れない」と思いました。その後、いろいろ悩んだあげく「禅を本格的にやろう」と決心し、大学院に退学届けを出したんです。

得度、そして、渡米

大学院を辞めた後は兵庫県の山奥にある安泰寺へ。自給自足の農業をやりながら坐禅をやる寺です。そこで、29歳の時に



僧侶になりました。安泰寺ではお金がなくとも動じない心構えができましたね。貧乏な寺で、節約のために廊下の電球を抜いたりしていましたよ。

6年目に師から「アメリカにある坐禅堂へ行って見ないか」と言われて、僕は即座に「行きます」と答えました。行こうと思った最大の理由は「自分がやっている禅が世界で通用するかどうか」を確かめたかったからです。33歳で渡米したんですが、僕が行った禅堂はマサチューセッツ州のパイオニア・ヴァレー禅堂と言います。建物は寺というより手作りの小屋。北海道みたいに寒い所ですね。お茶の箱をくり抜い

た御喜捨箱を置いていましたが、それだけでは生活できないのでアルバイトをして。ハンディ・モンク（便利屋坊主）と呼ばれる何でも屋です。大工の手伝いとかベビーシッターとか。

あの近辺は仏教への関心が高い地域なので、3つの大学で週1回の坐禅会もずっとやりました。だから、アメリカで延べ何千人もの人に坐禅の仕方を教えたことになります。そういうことを通して「禅はユニバーサルなものだ」と確信しましたね。同じ人間の身体で坐るわけですから。それから、アメリカでは「坐禅にどういう意味があるのか」を明確に伝えなければならなかったの

で非常に勉強になりました。禅の世界では「真実は語れない」とよく言われるけれど「僕はどこまで語れるかを試そう」と思ったわけです。「自分が社会に貢献できるとしたら、これかな」と思っていました。

2003年、日本の友人が「葉山に茅山荘（ちざんそう）という場所があるんだが、管理人のような形で住み込んでアメリカでやっていることを日本でやってみたら」と誘ってくれて、2004年3月に帰国。結局、ヴァレー禅堂には17年半滞在したことになります。現在、僕と家族が住んでいるこの茅山荘は大正時代の実業家の別荘だった建物。広い敷地内には川が流れ、茅葺の古民家、



東屋、観音堂があります。

日常意識の剥がれた光景

現在、10歳の時に感じたあの「違和感」は薄れています。あの時に感じた感覚は、たとえばあたりまえにコップだと思っていた物が、突然コップでなくなるような感覚。コップに「コップ」という日常意識を被せているけれど、たまに「被せている意識」が剥がれて、それがなにか謎めいたものになるのです。当時の僕にはショックでしたが、実はよく起きていることなんですね。禅をやるそれがよく解るので「日常意識の剥が

れた光景」を見慣れてくる。だから「本来の風景は意識の剥がれた状態であって、意識を被せてしまうことのほうが問題なのではないか」と感じるようになった。10歳の経験は「困った問題」ではなくなったわけです。現在は脳科学、認知科学、生理学など何でも借りてきて「坐禅中に何が起きているか」をいろいろな角度から深く解明したいと思っています。それと「臨床的仏教」を追求したい。「ありがたいお話」ではなく日常生活に適用するものとして仏教を現出させたい。仏教を「わざ化」するということですね。

僕にとって大学・大学院で培った教養

は「批判力」となっています。お釈迦様は「私の言葉を『偉い人の言葉だ』と思って鵜呑みにするな」と言いますが、それは科学的態度であり批判的精神です。大学の良い点は、疑うことが尊重されていること。草創期の禅も批判的精神がみなぎっていますよ。僕は新しい視野が開けていく感覚が好きなんです。世界が今までとは違って見えてくることの快感。その意味で、東大は非常に良い環境でした。

目標を定めない志を携えて

禅僧は「自分の人生を創造していく人」。



「特集」 卒業生 — それぞれの志を胸に —



他人が何と言おうと自分にしか辿れない軌道を描いていくことこそが僕の「志」だと思っています。きっちり目標を定めてそれをクリアする「志」はゴールテープを切るのが目的となりますが、「目標を決めない志」もあると思うんです。方向感覚だけを頼りに探りながら進んでいく。僧侶になったのは意外な展開でしたが、今から考えると僕はある方向感覚に導かれていた気がします。10歳の時に体験した感覚を大切にできる生活を具現化したいという志が通奏低音のようにずっとありました。

「無限に広がった真っ暗な宇宙の中に、ぼつんと生まれた小さな砂粒のような俺が

いて、ここで空を見上げている……俺はたったひとりなんだ。この無限の宇宙の中で、いつか、消えてなくなる」。

底なしの寂寥感もあるけれど、開放されたさわやかな思いもあって、なんとなく嬉しいことでもある。今でもその感覚の周りを回り続けている気がします。

仏教には「どこに行っても、自己を体験するだけだ」という言葉があります。

「火星に行こうが、銀河系外に行こうが、自己を体験しているだけだ。じゃあ、その自己とは何だ?」という問いかけ……それは、僕にとって志を託すに足るテーマだと確信しているんです。(談)

PROFILE

藤田一照 (ふじた・いっしょう)

1954年愛媛県新居浜市生まれ。灘高校から本学教育学部教育心理学科を経て、大学院で発達心理学を専攻。合気道部主将。28歳で博士課程を中退し、29歳で得度。33歳で渡米。2005年3月に帰国。現在、神奈川県葉山町在住。著作に『アメリカ禅堂通信』『ヴァレー禅堂雑想録』『私の坐禅参究帳』(いずれも月刊『大法輪』大法輪閣刊に連載)、訳書に『禅への鍵』(春秋社刊)、『ダルマの実践』、『フィーリング・ブッダ』(ともに四季社刊)がある。

ホームカミングデイ開催される

～東京大学卒業生室～

さまざまな場で活躍される東京大学の卒業生がキャンパスに集い、歴史と伝統を回顧し、まさに東京大学の「今」を感じ、将来への思いを重ね合わせる。東京大学は、ホームカミングデイを通じ、こうした機会をととても気軽な形で提供していきたいと考えています。

第4回ホームカミングデイ

本年度のホームカミングデイは、去る11月19日（土）、素晴らしい晴天に恵まれた本郷・駒場両キャンパスにて開催されました。当日は、風もかなり冷たく感じられる陽気でしたが、両会場を合わせて3000名を超える方がご来場されました。

来場された卒業生の方々は、思い思いに一日を過ごされました。

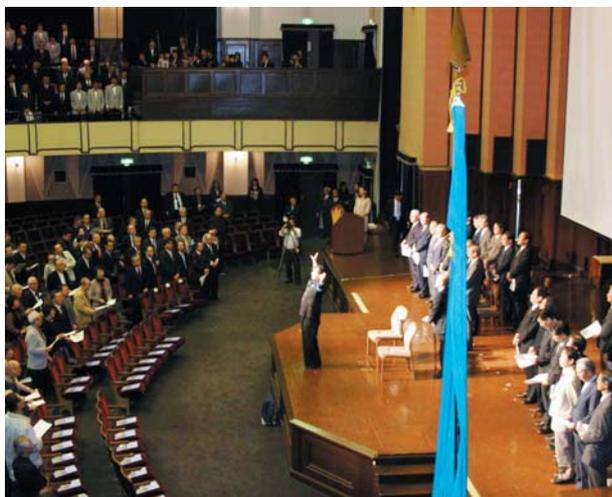
……キャンパスマップを片手に、昔懐かしい赤門、安田講堂、三四郎池を散策する。近年誕生した数々の建物に大学の進化のスピードを体感する。なかなか入る機会の少なかった総合研究博物館、史料編纂所などを訪れ、大学の幅広さ、奥深さをあらためて実感する。日本家屋「懐徳館」に足を踏み入れ、キャンパスにこんなところがあったのかと思わず驚嘆する。特別鼎談、落語、サッカーなど各種イベントに参加する。そして夕刻には卒業した各学部・学科の懇親会へ……

そんなホームカミングデイのイベントの一部をご紹介します。

大講堂における記念式典

昨年に引き続き渡辺あゆみ氏（教養学部卒業）の司会により始まった式典では、小宮山総長より、東京大学を取り巻く環境、そして大学が目指す方向性についてメッセージがありました。さらに桐野理事・副学長より、卒業生とのコミュニケーションをより深めていくための取組みについて説明がありました。

式典の後半には、応援歌として50年以上も愛されてきた「ただ一つ」の作詞者大森幸男氏、作曲者山口琢磨氏が壇上に登場されました。おふたりはこれが初めてのご対面にも関わらず絶妙のコンビネーションで、数々のエピソードに会場は温かな笑いに包まれました。当時は折しも戦後復興の時期。戦地から戻った学生らが銀杏並木にあふれ返る光景を見て、彼らが、「ただ一つ」の東京大学が、これからの日本を作ってゆくのだ、という思いから作られたとのこと。会場の全員が立ち上がり、「ただ一つ」を斉唱した際には、中には涙を浮かべる卒業生の姿も見られました。



特別鼎談 日本映画の「現在・過去・未来」 ～国際的な観点から

特別鼎談は、映画監督吉田喜重氏（文学部卒業）、そして監督のよきパートナーであり映画女優の岡田茉莉子氏をお招きし、蓮實重彦元総長が進行役を務めました。「日本映画の現在・過去・未来」と題したこの鼎談では、多くの貴重な映像をまじえながら、国際的な観点から吉田監督作品の歴史や海外での評価などが語られました。監督は松竹に入社するとき、映画界が本当に自分に向いているのかと迷ったそうですが、当時の指導教官に「映画の世界が合わないと思ったら、いつでも大学に戻ってきなさい。いつでも門戸を開いています」と言われたとのエピソードに、当時の大学の寛容な雰囲気を懐かしく思い出された方も多かったのではないのでしょうか。舞台裏の秘話などもあり、2時間という時間が瞬く間に過ぎていくように感じられました。

懐徳館一般公開・現役学生による キャンパスツアー ほか

加賀前田家ゆかりの家屋であり、現在も東京大学の迎賓館として利用されている懐徳館の回廊そして庭園は、大変な賑わいとなりました。暖かくやさしい日差しが縁側を包み、まさに都会の喧騒を忘れさせてくれます。現役の茶道部員による茶会・喫茶サービスも好評で、孫のような学生のお手前に目を細める卒業生の姿が見られました。キャンパスツアーには若い世代の夫婦からお年を召した方まで400名を超える方が参加されました。現役学生の案内を聞くだけでなく、参加者同士で会話をしながら散策されていたことがとても印象的です。



駒場キャンパス

駒場キャンパスでは、木畑洋一教養学部長による挨拶と小島憲道副学部長による現状報告に続き、本郷からのインターネット中継が行われる一方、立花隆特任教授と黒田玲子教授による「科学と社会のよりよきコミュニケーション」と題した特別講演会が行われました。両氏の鋭い問題提起に、様々な年代の聴衆が熱心に耳を傾け、予定をオーバーして質疑も活発に行われました。また、梶幹男秩父演習林長と箸本春樹氏による「駒場の樹木をめぐる講演会」にも多くの方が集い、キャンパスの樹木を解説しながらネームプレートをつけるツアーが行われました。家族連れもまじえた和やかな雰囲気でも、ぜひ来年もこの企画を、という声があちこちから聞こえました。

ゆるやかなつながりを目指して

東京大学は2007年に130周年を迎えます。よき伝統が脈々と受け継がれ、守り続けられていること。一方で、新しい時代の先頭に立つとの気概と自覚を持ち、あらゆる面から生まれ変わりつつあること。そのような大学の両面を、このホームカミングデーを通じて感じとっていたのではないかと思います。

2006年度は11月11日（土）に開催される予定です。20万人とも言われる卒業生の数からすれば、3000人という来場者数は決して多くはありません。まだまだ若い世代の卒業生の数も少なかったように感じられます。会場にいらした方々にお願いしたアンケートなども踏まえ、来年はより多くの方々に過ごしていただけるものにしていきたいと考えております。

小宮山総長の言葉にもあるように、解決すべき課題が山積みの「課題先進国」日本において、東京大学は世界に先駆けて様々な社会的課題に取り組んでいく必要があり、そのためには卒業生との連携が不可欠です。ホームカミングデーは、卒業生と大学が、ゆるやかに、しかししっかりと「つながっていく」ための基盤です。他の大学にはない「東大らしさ」をもっと多くの卒業生に、そして社会全体に伝えることができるように努力してまいります。